

連載
第38回

福聚山史

池浦 泰憲
及川 一晋
編 文

戦後復興から現代へ

8、及川真学上人最後の思い

「福聚山常円寺開山中道院日立上人以来歴代の諸上人：中興本妙院日修上人：」

常円寺では法要などのご回向に歴代の住職の名前を読み上げる際、本妙院日修上人、すなわち第三十七世である及川真学上人に「中興」とつける。

「中興」(＝「中興の祖」とは、いうまでもなく一度衰えていたり途絶えた物を復興させるという意である。太平洋戦争下の空襲により伽藍を焼失した常円寺を復興させ、さらに寺外へと活動を広げていく過程を連載三十回からみてきたが、その先頭に立っていたのは紛れもなく及川真学上人である。

その真学上人が平成四年(一九九二)三月十九日、八十四歳をもって遷化(せんげ)する。同月二十二日に通夜、翌二十三日に密葬儀が執り行われ、同年五月十八日に本葬儀が当山と立正大学学園の合同葬として営まれた。当時の新聞(平成四年五月「中外日報」)にその模様が伝えられている。

葬儀は、京都・大本山妙顕寺貫首を大導師に迎え、千葉・本山本土寺、京都・本山妙覚寺、千葉・本山日本寺の各本山貫首と立正大学学園常任理事を副導師として営まれた。

上人が立正大学学園理事長をはじめ同大学の要職、また京都・本山妙覚寺貫首、さらには日蓮宗海外布教後援会会長、日蓮宗宗務顧問、日蓮宗勸学院副院長、総本山身延山久遠寺常置会議長等々、宗門内外の要職を務めてきた関係から二千人

余りが参列した。弔問に訪れる人の波が絶えず、本堂に入りきれない人は、客殿や竣工間近の祖師堂で、モニターテレビに映し出された法要の様子を見た。

弔辞には、当時の宗務総長、身延山久遠寺総務、立正大学学園理事長が立ち、宗門においては、その生涯を正法弘通(くわうつう)と檀信徒教化、祖山である身延山の護持に尽力された功績、そして、特に海外布教

後援会の結成、英字新聞の発行、サンノゼ妙覚寺別院の建立等々、海外布教に力を注いだ数々の功績に対し謝辞を述べられた。また、昭和四十年(一九六五)、立正大学学園理事長に就任後、キャンパスの整備拡充にあたり、



在りし日の及川真学上人(1990年6月6日「全国興統会アメリカ大会」シアトル日蓮仏教会にて)

埼玉県熊谷に十二万坪の土地を求め、新たに大学キャンパスを建設した事績、さらには学園紛争時において、先頭に立ち諸問題にあたったことが讃えられた。

また、式では海外布教に力を傾けた上人にふさわしく、日蓮聖人の御遺文『観心本尊抄』が、日本語と英語で拝読された。

ところで、真学上人が遷化される三カ月前、上人は平成三年(一九九一)十二月二十日の感話会で集まった方々に次のように語った。

：一期一会という言葉がございしますが、みなさん方とは毎月のように、あるいは月に何回も、お目にかかれるような縁を持たせていただいて、私は幸せ者だと有難かったと思っております。

やはりある程度のところで自分では見極めが必要な気がいたします。ですから、今日は先々月や先月でしたら、副住職が「今日は私が代わってお勤めをしましょうか」といつてくれて、私も気軽に「おお、やってくれや」と口から出るのですが、どうも今日だけは「わしがやりたい」と。ちょっと最後なんだからぼつてみたいと思ってお勤めをさせていただきました。誠に有難い縁であつたというふうに思います。

仏教では昔から因縁果報と申しまして、原因があれば必ず結果がある。これは一般の世間でも科学の世界でも同じように言われる。しかし、仏教ではその間に、因と果の間に縁を入れまして、これが大事だという。

：むしろ、原因も結果もそのけにして、縁というのが非常に大事であると仏教ではいつております。みなさん方と私の関係も不思議な常円寺という縁があつて、お目にかかれるようなことになりました何十年というおつきあいをさせていただきました私は結構なことだったなと感謝申し上げます。(『本妙院日修上人遺香』より) 及川真学上人は終戦直後の法務を担当したときから、常円寺の復興に力を尽くし、多くの檀信徒との縁を築き、深めてきた。その「縁」という上人自身の足場があればこそ、常円寺の復興はもちろん、宗門内外へと力を発揮し、多くの果を得ることができたのではないだろうか。そのいわば最後の思いが身体の不調をおして勤めた感話会での一言一言に現されていたにちがいない。